

* 目次 *

昏迷	9
白い道	21
希望	36
登攀と挫折	43
暗中模索	53
微光	69
芽生え	92
嵐	131
結晶	173
余白	191
あとがき	201

《井上洋治アーカイブス》

〈書評〉わが戦友へ——余白の旅を読んで（遠藤周作）……………202

〈書簡〉「修道院長から面会許可が出た報告」……………205

（井上洋治から遠藤周作へ。一九五一年七月二二日付）……………208

〈書簡〉「修道院訪問と写真の御礼」……………212

（井上洋治から遠藤周作へ。一九五一年一〇月七日付）……………216

〈書簡〉「アルプスで静養中の遠藤を見舞う手紙」……………228

（井上洋治から遠藤周作へ。日付不明）……………

「日本カトリシズム」の開拓者——求道者を包む大地の思想（小野寺功）……………

〈井上洋治 人と思想〉②（山根道公）……………

日本人の血の通ったキリスト教への道程……………

昏迷

今しも真赤な太陽が、青く広い地中海の水平線に沈もうとしていた。ひろびろと広がる海岸線の遙か左手には、遠くヒッタイト時代から神々が住むと伝えられている聖山カシウスが、その柔かな山はだを残照のうちにくつすらと清らかにうかびあがらせていた。

海から吹きつけてくる潮風は意外に強く、たった一軒海岸にあるレストランの前庭に立っている私の頬を横なぐりにした。つい先ほどまで、茶褐色のせいかわ、青い海と白い波を背景にしていたのはつきりと遠く下の方に見えていた古代セルキア・ピエリアのわずかに残っている埠頭の遺跡も、今はもうぼんやりと薄暮のうちに消えていこうとしていた。

黒ずんだ海とは対照的に、茜色の夕焼け空が目にしみるように美しくかった。この色をいつまでも心に焼きつけておきたい、そう思いながら私は落陽を眺めて立ちつくしていた。

ローマ時代には、アンテオケアと呼ばれていた、現在のアンタキヤの町から南西三十キロほどの所に、古代セルキア・ピエリアの港町があった。往時はシリアの首都であり、ローマ、アレキサンドリアと並んで人口五十万を数えたといわれる、ヘレニズム・ローマ時代の代表都市アンテオケアの海港として栄えた町で、その埠頭の遺跡がわずかにサマンダーグ村の近くに残っているのである。

その村の背後には、「チトスのトンネル」と呼ばれている運河がある。水流をせきとめ、岩をくりぬいて作られた長さ数百メートル、高さ十数メートルに及ぶ広大なもので、当時のローマ皇帝チトスの権力と富とをいかになくしのぼせるものであるが、私たちがこのトルコの片田舎の町を訪れたのは、ローマ皇帝の偉業をしのぶためではなかった。イエスの弟子パウロが、バルナバと一緒に、おそらく紀元四五年頃、第一次の伝道旅行に船出したのがこのセルキア・ピエリアの港からだったからである。

日はすでに西の水平線に沈み、生まれて初めてみるガス燈の青白い光が、羊の肉をかこむ私たちの食卓をてらしだしていた。アラビアンナイトを連想させるような、頭にターバンを巻いたトルコ人の料理人が、暗闇からガス燈の光の輪の中にあらわれては、また暗い闇の中に消えていった。

食事も終り、一人で波の音とヒューヒューとなる風の音とを聞きながら、パウロの船出の日を思い、更にパウロの回心の日を思いながら、暗くなった海に向かって立っていた私のまぶたには、まださつきみた夕焼けの空の美しさが焼きついていていた。

昔から何故か私は夕焼けの空が大好きである。まだ幼稚園に通っていた子供の頃、よく母に手をひかれながら眺めた夕焼け空の記憶が、意外に強く私の心の奥底に焼きついていいるからなのかもしれない。

私は六歳半までを大阪の天王寺で過ごした。今は上本町六丁目の近鉄の駅には立派なビルがたっているが、当時は小さな三笠屋というデパートがあるだけであった。上本町六丁目の駅は、近鉄の前身である大軌鉄道の始発駅で、私の家の近くにはこの大軌鉄道の踏切りがあった。私は母に手をひかれて散歩しながら、よくこの踏切りのところで夕焼けの空を眺めたものであった。

一昨年岡山への所用の帰り、私は初めて私の育った天王寺の北山町のあたりを歩いてみた。太陽のギラギラと照りつける暑い夏の午後であった。踏切りはもうなくなってしまうていて、道は立体交叉になつてしまつていたが、それでも弟との喧嘩で足をけがしてかつきこまれた赤十字病院は、きちんとその場所に残つていたし、一年の学期だけをすごした小学校は、分校にこそなつてはいたが、今にもこわれそうな木造の姿を真夏の日ざしのもとにひっそりとさらしていた。

特に私の育った北山町のあたりが戦災にあわずに焼け残つていて、くねくねとした狭い路地や格子のたたずまいをそのままにとどめていてくれたのが何とも嬉しかった。

横断歩道の信号を待つ間

幼い少女が母に夕焼けを教えている

「夕焼けよ 夕焼けよ きれい」歌のようにくりかえして

母の答えはなくて 信号が変るや

子を叱り 急がせて歩き出した

子はもう 夕焼けを言わなかった

母におくれまいとする子の急ぎ足

母には 夕焼けを見る間もおしく

急ぎ帰らなければならぬ理由があつたのだろうか

子の心にこの日の夕焼けは強く残ることだろう

消えないままのさびしさを私の心にも残している

《井上洋治アーカイブス》

〈書評〉

わが「戦友」へ——余白の旅を読んで

遠藤 周作

今から三十年ほど前——まだ終戦後の日本がどの国とも国交を恢復していなかった時、私とこの本の著者とは偶然、同じ船の四等船客として出会い、共に仏蘭西フランスに向かった。彼はきびしい修道院で修業するためであり、私は文学を勉強するためだった。

その時以来、神父となった著者と半生にわたる交わりを続けた私は、この本の評者としては適当ではないであろう。頁をくりながら彼が書かなかったさまざまな思い出が溢れ出て、客観的に読めないからである。

著者も私も共に日本人には縁遠い基督教の信者である。著者も私も共に仏蘭西留学以来、西洋的な感覚にあまりに長くまぶされた基督教を、いかに日本人である自分に引きつけるか、悪戦苦闘してきた。

失敗し、挫折し、時には同じ信者や基督教の聖職者たちから批判と非難を受けながら、しかしこれ

遠藤兄

三雲兄

寫眞有難うございました。ほんとに写真お上手ですね。すっかり感心しました。大変によくとれてゐるので、僕も大変に嬉しく、大いに感謝してゐます。さつそく東京へ送つて、何人かの人間を喜ばしてやる積りです。家へはわざ／＼送つて下さるそゝで、きつと随分喜ぶ事でせう。

先日——といつても、もう一月以上になるかな——は、此んな山奥迄、わざ／＼僕を訪ねて来て下さつた御親切を、盡々と感謝して居ます。久し振りで、とてもなつかしく、実に嬉しい気持でした。日本や、フランスの色々な事や、友達の様子などを、知る事が出来てとても嬉しかったです。僕は、實際、気が短くて、不氣用

で、礼儀も知らず、どうもとりえのない男ですが、もし、どこかい、所をかつてもらへるとすれば、あやまることと感謝することを知つてゐる男でせうか。僕は此のあやまることと感謝すること、此の二つ

は、神が僕にくださった、尤も大きな御恵だと思ひ、いつも神に感謝して居ます。三雲さんのきれいな絵葉書、有難うございました。

弟さんにも、僕の為、寫眞を、何度も焼増して下さつた事を感謝してゐる旨、御傳へ下さい。

僕も漸く身体が本調子になつて、今度十月二十八日（日）「王たるキリスト」の祝

「日本カトリシズム」の開拓者——求道者を包む大地の思想

小野寺 功

1 霊性の人

あれはいつのことであったか、私がまだ清泉女子大学に在職中に、黙想指導か何かでいらした井上神父と、大学の一号館の階段でバッタリお会いしたことがある。

その時井上神父は、あの魅力ある笑顔で、二言、三言挨拶されたあと、「私は学者ではないから……」と謎のような言葉を残して去っていかれた。それが果して何を意味するのか、長い間私には理解できなかった。しかしある日ようやく『余白の旅——思索のあと』の著書の中に、その答えを見出すことができた。

象牙の塔の中の学問も悪いとは思わないし、一生かかって一人の西欧の神学者の神学を追究することにも、もちろんそれなりの意味はあろう。しかし司祭は学者ではない。司祭は何よりもまず、イエスの福音を人々に伝える役割をになつた者である。日本に生き生きとした神学がうまれてくるとすれば、それはイエスの福音と日本人の心情との衝突と対話の接点からしかうまれてはこないはずである。

〈井上洋治 人と思想〉②

日本人の血の通ったキリスト教への道程

山根 道公

や真生会館等での聖書講座なども盛んに行う。

一九七八年には、『日本とイエスの顔』の内容を一般の日本人の心に響くようにさらに噛み砕いたキリスト教入門書『私の中のキリスト』（主婦の友社）、さらにその翌年には、『キリスト教文学の世界』の「月報」に連載した対談を集めた対談集『ざつくばらん神父と13人』（同）を出版する。この対談の相手には、遠藤周作、福田恒存、高橋たか子、田村隆一、阪田寛夫、田中小実昌、河上徹太郎など多くの文学者がいた。

『余白の旅——思索のあと』は一九八〇年九月、著者五十三歳の時に書き下ろし作品として日本キリスト教団出版局より刊行された。本書は「あとがき」にあるように、四年前に刊行された処女作『日本とイエスの顔』が好評で版を重ねるなかで、その著書ができるまでの背後にある出来事や思索について説明した方がよいとの思いに至った著者によって書き上げられた、精神的自叙伝である。

著者は、一九七六年三月に『日本とイエスの顔』を刊行した直後の四月からはカトリック学生センターである東京・信濃町の真生会館の理事長に就き、東京・関口の東京カトリックセンターに移り住む。そうしたなかで、一般の日本人たちにイエスの福音を伝えるための執筆活動に力を注ぎ、さらに新宿・朝日カルチャーセンター

また、この頃より、文学関係の文章やエッセイを多く執筆している。主なものをあげると、「遠藤氏の求めるもの——解説」（講談社遠藤周作文庫『大麥だア』一九七五年）、阪田寛夫『背教』書評（季刊創造一九七六年一〇月）、同伴者イエス——遠藤周作のイエス観（『同』一九七七年四月）、「矢代静一氏のプロフィールと作品」（『本のひろば』一九七八年七月）、「三浦朱門の姿勢」（『筑摩現代文学大系81』七月）、「同年二月）、遠藤周作『灯のうるむ頃』「解説」（角川文庫、一九七九年八月）、「森英介の信仰と詩」（『毎日新聞夕刊』一九八〇年二月六日）、読売新聞コラム「しおり」連載（同年七月七、一四、二二、二八日）、書評「矢代静一随筆集『天国と泥棒』（キリスト新聞）同年八月二六日）、『遊牧民の少女』（『文学界』一九八一年四月）などである。